ミオヤの光

鳥跡の巻

○

眞實大乘教の意に依れば現在も未來も此界も淨土も悉く共に大みおやなるあみだ如來の大心海中にてあり。されば經には如來是法界身。入二一切衆生心想中一とまた善導大師彌陀身心徧二法界一。映現二衆生心想中一と讃しなされたるは、宇宙法界一切處として如來の御身と心との徧滿せざる處はないので全く如來の大悲心光中に在りながら衆生自から知らずして自分の業報に依りて只娑婆人間界と計り見て居るのである。恰も立派な人の住居の中に在りて蠅は只蠅たけに見て居る樣な物である。若し心眼開きて見れば此處もまた如來淸淨莊嚴の淨土である。されば觀經にはあみだ佛去此不遠と說玉ひし。

されば窠でも窟でも只專らみだの名號を稱なへ常に大みおやの大光明中なることを忘れず如來の應身現に此處に在ますことを念し一切の所作は皆如來より命せられたる事業なることを思ひ、同じく如來の大心界中なれど現在私共が生活して居る方は粗末な

方にて働らく處である。たとへば農家にて働らく時には粗末な服を身につけてまつ黑に成て働らき而して休み遊ぶ時には衣服を着換て奇麗な處にて遊ぶように、同じ如來の中に在りて現在は粗末な身と服とに一生懸命働き而して遊ぶ時は淨土の方にゆきて身も服もきよらかに成て樂を爲るのである。然れども農家にても働らく時に樂をして居つたならば休む時に奇麗に成て樂をすることが出來ぬ。實に此身と此世界は一生懸命に働らくべき爲に人界に出て來たのである。

されば大經に汝等是しやばに於て廣く德の本を植へ恩を布き乃至德を爲し善を立て正心正意齊戒淸淨なること一日一夜すれば極樂に在りて善を爲すこと百載するよりは、勝れたりと、かように此世界は一心につとむる處であるから、何を爲すのも皆正心正意の佛道修行でないものはない。又他人から讒謗されても還て私をきたへて下さる如來さまの賜物と信じて勇みて進むべきである。それを知らぬと只惡く取て自分の心を惱まし身をいため、他人を恨み自心をかこちなどして、自分の心までもねぢくれて來るそれを還て如來さまから黑鐵をきたへて名劍と爲て下さるのであると想へば、

打たばうてたゝかばたたけくろがねも
つるぎとぞなる忍びとほせば

人間一日の命も皆如來より賜物と信ずる時はいか成る場合とても自からくぢけたりそれから自殺するなどゝいふことはできぬ。いか成事をも悅びすゝみて淨土の業とせねばならぬ。

○

によらいさまはじひのをやさまであるから、よるもひるも、いつでも、かわゆい子であるわたくしらを、おまもりなされてござる。

このによらいさまの、じひのおすがたを、こゝろにわすれぬように、をもひなされよ。ぜんどさまは、をしへてくだされた、如らいさまはうるはしいをすがたにて、光みやう、かくやくとして、つねにわれをてらし、みとほしてござるとおもふてをれと、く

うちうにござつて、われをみとうしてくださると。またもくせんにいますとおしへられた。

がんそ大しは、いつでもくうちうに、によらいさまを、をがんでをられしことを、をかくれのときにをふせられた。くわんのんさまの、をつむりに、によらいさまのおすがたのござるのは、くわんのんさまのこゝろに、いつでも、によらいさまをわすれずに、おもふて、をるこゝろを、かたちにあらはしたのである。

あなたも、このをすがたををがみて、いつでもくうちうにござるようにおもうてをると、いつでもをやさまのじひのをすがたをわすれぬようになります。本とうに、ほんぞんさまをあんちしてをくのは、人のこゝろにも、いきたによらいさまを、わすれぬように、こゝろに、あんちしてをけといふことを、をしゆるための、ほんぞんさまでござる。

ゑしんそうづは、

ぬればゆめ、さむればうつゝ、つかのまも、わすれがたきは、みだのおもかげ。

とくほん上人は、

をにもでよ、じやもでよ、でよと、せめだして、すましておけよ、あみだほとけを。

とよみなされた。

○

佛教に聖淨二門と分るれど所詮は自己の心が佛と成る外は無い。大原問答に往生と成佛とは同じ事であると。往生にも精神の往生と身體の往生とある。

成佛に自己の力で佛に成るのは丁度木と木と摩擦して自分と火を出すが如く自力で悟の光を發すのである。他力と云は阿彌陀如來光明の火を以て衆生の心の炭につく時は彌陀光が卽ち自己の光明と成て光明の生活と成る。光明の生活が卽ち聖道門に云ふ處の成佛得道と同じことである。

精神には此世と後世と一體である故に、今現に此精神に如來の光明を得る外に佛法は

ない。如來の光明生活に入れば現世を通して永遠の生命となるのである。理論よりは事實である。身體も生命も財產も一切は自己の精神生命ありての事である。

此精神生命に如來の光明が獲得すれば信念の瓦斯に火が點したのである。念々光明生活と爲る。釋尊善導大師元祖大師も皆光明生活に入て現世を通して永遠の光明に入た人である。願くは光明生活に入て今日の事務につとめられんことを。

次に御內室は一心一向に求法に執心のつよひつよい力を持て居る。念佛者は一心不亂執持名號なので、執と云執念がみだに對して深いのがよい強いのがよろしい。執心が一心一向にかたまつて強いけれども、光明得られないので煩悶の中にとらはれて居るあの位執心深いのであるから、十分に光明獲得したならば、天理教の山中きみ子のような、つよい〳〵信仰家と成るのである、一心の執かつよい丈けに光明獲られぬうちは隨分煩悶も強い。

承はれば昨年或人の中傷にかゝりて非常に煩悶したとの事、矢張それは執心強いから物を氣に懸ける事も強いのであると思ふ。故に若し之に充分なる信仰の光明を獲る時は觀喜信樂の度も強いのであると思ふ。故に若し、

譬は井戸より瓦斯が沸出してこもる時は若し火を點ずればいかに瓦斯が多量にふん出しても益明度がつよくてよいが、之に火を點せざれば還つて害をなす。佛に對する執念の度が強い求道の念つよいが之に光明獲得する時はいよ〳〵明らかな生活と成る。若し光明得ざる間は多量の念の瓦斯が胸に充滿して煩悶となる樣に存じれ候。若し之を保護し信念の光明得せしめば實に立派な信仰出來るものと存候。願くは共に〳〵如來大慈の光明によりて復活せられんことを祈候

○

あなたのつよいつよい一しんで、によらいさまをおしたいなさるのはほんとうにふかいのです。あなたがねてもさめても、をやさまをおしたい申すのは、をやさまもやはりあなたをふかくあいしてくだされます。

しうきやうしんの、ふかいかたは、ほとけさまを、ねてもさめてもわすれられぬほどこいしいのです。それでもおがむことができぬと、こころがくるふほど、こいしくなるのです。ほとけさまをふかくおしたい申す、むねにつもりつもりてくると、たとへばいどからがすがふきでるのが、たくさんこもりても、火をつければよいが火をつけぬとがいをするとおなじく、ほとけさまおもいの、がすが、むねに一ぱいになると、こうみようのひがつかぬあひだは、ちつにくるしむのです。あなたのむねのうちに、こもりこもりて、くるしいのは、どうじやうに、たへませぬ。どこまでも、あなたのこゝろが、おひかりであかるくなりて、やすくひぐらしできるようにしてあげたいのです。

あなたのつよいつよい一しんに、をひかりがつけば。てんりきようのおみきさまのような、ふかい信じんしやとなるので　。あなたのその一しんに、十ぶんにおひかりのひがついたならば、たくさんのひとにも、しんこうをわけるようになるのです。ますますたのもしいのです。くるしみのつよいほど、おひかりがえますれば、ありがたいのも、ふかくかんずるのです。あなたは、一しんがつよいだけ、おもひのがすが、むねにこもると、くるしいのです。

あなたのだいぢのいのちをたいせつにしなされ。このごろはおぐわいいかゞでありますあなたがそれほどに、おやさまをおしたい申して、それがためにくるしんでをるこゝろをば、いちにちもはやく、をやさまのをじひをもつて、くるしみのなかから、すくひあげたいとをもひます。

あなたのをやさまをもひのがすが、おほいだけ、ひがつかぬうちは、くるしみがふかいのです。そのかはり。ひがつきますれば、りつぱなしんこうとなるのです。

びようきになんどなつてはいけません。これからいきたかんのんさまとなつて、一しんにをやさまにおつかへ申して、はたらくみになるのです。あなたは、一しんつよいだけに、おひかりがえないといのちをちぢめ、みをくるしめるのです。あなたは、どこまでも、おひかりをうけないとあぶないのであります。

それほどに、をやさまをおしたい申すこゝろを、どごまでも、おたすけ申しますからけつして、いのちをちゞめたりこゝろをくるしめることはやめなされ。

をやさまから、たまはりし、いのちをたいせつにしなければいけません。どんなことでもとけぬことはありません。

○

すべてを大おやさまにおまかせ申しあげて、あなたのおぼしめしにかなうように、おねがひ申し候。

人げんかいにだしていたゞきて、こんどの大じをとりそこねては、また三あくどうのやみのなかにおちては、いつまた、大おやさまのをじひにあづかることか、とてもふたたび、じひのみひかりに、あふことはできぬ。いかなることも、大おやさまにおすがり申して、こらへるやうになされ候へ。

いまに、わがにほんの人々が、大おやさまのごおんと、おぼしめしとをしらずして、をやさまの、かうみやうを、しらずして、みなやみのなかに、おちてしまうから、一しようけんめいになりて、大おやさまの、おぼしめしを、よのひと〳〵にしらせなくてはならぬ。いのちにかけて、つくさなくてはならぬことがあるではありませんか。

○

天地萬物、山河大地一切の動植物に至るまでも悉く皆法身如來藏の影現ならざるはなしてふ、佛陀の敎に本つきて觀し來れば、野に山に綠りと現はれ黃と化る、千變萬化の現象界、皆隨緣眞如のすがたに　、妙また妙ならざるはなし。殊に〳〵ありがたきは、

宇宙萬有中最上無比の現はれなる無量光如來は、衆生大慈悲のミオヤとして、光明遍ねく十方法界を照し、殊に念佛の衆生を光明のなかに攝取して、子をおもふ親の慈悲のしからしむる處、ついに信仰の靈を養ふて親子の對面できるやうにして下さる。

大ミオヤの慈悲よりかたじけなきはなく感じられ候。

○

うけたまはれば、またたいそうごしんばいなことができましたさうでわたくしもしんばいしてをります。

によらいさまをおたりにして、どんなことができても、ます〳〵、によらいさまを、ちからにしてをれば、ついには、やすらかなみちが、ついてきます。人げんの一生は大じであるから、一にちでも、むだなひぐらしをせぬように、おねんぶつを申して、によらいさまの、をじひのふところずまいであることを、わすれぬようにしなされ。

○

實に夢幻の世の中に種々さま〳〵の人事同じ日日を暮すについて、すべては因緣に任せて而して如來大悲の光明に目くらしせんことのみ希候。もう御地方にてはソロ〳〵雪も降初しことならむと存じ候、何れは面語に萬て可申上候

○

とかく、しやばくがいのことなれば、そのあと〳〵と、さまざまのことがわきだしてくるから、それにつげても、ただ〳〵大おやさまをたより申ほかに、みちはないと存候。

もはやことしもわづかになりてきました。おんちでは、もうゆきがふりはじめたのでせう。大みおやの、大ひの、いとあたたかな、ふところのなかに、こうめうのひぐらしなさるゝやうにねがはしく候。

○

北風寒き日も、如來大悲の懷の裡は暖かに、霏々と雪降る闇き夜も、彌陀光明のなかに明るきを感ず。

たとひ身は娑婆八風の吹荒む中に在ても神は無爲泥洹の淨土に栖あそぶ。讒謗誹毀の荒礪を以て砥かされば佛性のさびは除く能はじ。

此世界を樂しく觀るも苦しく見るも皆人々の心丈に觀して居るものとおもはる。印度の有名なタゴールは凭云つて居る、此世界萬物は悉く神の善から顯はれたものであるからすべての物を能く心を用ひて見れば悉く喜を呈して居らぬ物はないと。吾人は宇宙萬有は悉く如來の淸淨歡喜智慧不斷の光力を被むりて居らぬ物はないとおもはるゝ先づ朝起て太陽の東の天から昇る空を眺めても實に淸らけく、新たに鮮な事よ、本とうに淸淨光が萬物に滿て居ればこそ凭はきよらけく現はれる。而して天道樣の御面には滿面の歡をたゝへて居らしやる。而して世が一面に明くなると只今見へなかつた山河大地一切が明らかに見ゆるは智慧の現はれとおもはるゝ。また太陽の赫々たる御勢ひは不斷の活動なさるゝをみてもどうしても淸淨等の光明の現はれとより外はみへぬ。

地上にある萬物一として其が現はれともはる。雨のふるのも空氣を淸らかにする爲に雨がふるとき面白そうに雨が降て居る。而して降ては流れまた蒸氣と成りて空に昇りなどして不斷の働が休むことがない。

我等のからだでも、よく知らぬ人は垢が出てきたないと申すけれどもさうではない。からだの働きは毎日食た物で後を補つて新陳代謝して不斷に新たに淸く潔くして居る新しく淸くする目的の爲に一方の方に除去る方を見て垢をきたないと云のは、其垢とてもついには淸められて草木などの新しい淸き物にかはりて出て來る。からだの中の血のめぐる處またすべてはいつも喜をたゝへて居る。かようなわけでありますから、私共の心も成るべく大御親の光を我心として常にきよらかに快よく潔よく歡喜に充され不斷の活動して、おやさまの御意を意として生活いたし度存候。

○

そののちはごぶさたいたしてすみませぬ。このごろはおからだはいかゞでありますかをだいじになされませ。はやくおたつしやになつて、大をやさまのをほしめしを、よの人びとに、ひろめるようにしてほしく候。

よはむじやうにて、時のうつりゆくことはすこしもとゞまつておらぬから、どうか、大おやさまのをじひを、一人なりともおほくのひとにをよぼしてくだされ。

六どうのなかに、人げんに生るゝことはよういでない。たとひ人げんにうまれても、ぶつぼうにあふこともなか〳〵かたいことであると、をきやうにといてある。また、ぶつぼうにあふても、いくらきゝても、大おやさまをほんとうにおやさまとおもふておやこのなのりあひが出きて、をじひのふところすまゐとなり、またをじひのちぶさを、あさな夕なにはぐまれて、いつでもおやさまとはなれぬなかとなるといふことはよほどよりかはしゆくいんがふかくなければえられぬことですよ。

また、しゆくゐんの、とういひとは、あみだによらいと申あげるをかたは、とほい〳〵西のあなたにましまして、しんでゆかなければ、御じひをかふむることはできぬと、おもふてをるひともある。

せんどう大しは、によらいさまと、ねんぶつしゆじやうとの、あひだには、しんゐんごんえん、ぞうじようえん、と申して、三つのふかい〳〵ちかい〳〵したしい〳〵つよい〳〵をいんねんがありて、きつてもきれぬ、はなれたくもはなれられることのできぬ、あいだがらであるとおふせられてある。

ほんとうに、いつでも〳〵大おやさまの、あたたかなおじひをはなれて、どうしてわたくしどもの、しんこうのいのちが、つなぐことができませう。

なくこゑに、はゝのちゝは、くちのなかにうけながら、それともわからぬのは、このあいだ、うまれたばかりの、あかんぼうである。

大おやさまの、じひのちゝを、いたゞきながら、それともしらず、みふところのなかにゐながら、左ともおもはずして、おるのはわたくしどもである。

あさばんに、むりやうじゆによらいの、おかうめうの、とくをさんだんして、おなたの光めうのなかに、このよながら、おやこの、なのりあひができる、ばかりでなく、ます〳〵をじひにはぐまれて、しんこうしんが、おゝきくなりて、じぶんばかりではなく、よのすべてのきやうだいしうに、おやさまをしらせ、まつたくきやうだいのしんじつが、あらはれてくるように、どうかして下され。

○

時下新緑ます〳〵みどりの色の添ふるを見るにつけても法身の大みおやは萬物をめぐみ給ふ御いつくしみをおもはざるを得ず候。

報身の慈悲の光明も私どもの心をいつくしみたまふこと尚々深きことなれば、私どもも草木のやうに眞正なこゝろにて大みおやのまに〳〵念して居りしなれば信念のみどりもます〳〵色まさりゆくべき筈なるに凡夫のこゝろの淺ましさ

大みおやの聖旨のまに〳〵こゝろを用いず、自分のほしいまゝなる念にて日を送り夜を明し、

太陽の常に照せるごとく、

大みおやの光明は私共の心を照し、此頃の氣候のそれよりもいやまして私共に對してはぐみの力を興へたまふなるも、我ままものゝ常として、無始己來の習慣に捕はれて高く高く清きに〳〵向はしめ給ふあなたの聖旨に隨ふことの出來ぬ愚さを、おもふにつけて、頼むべきは大みおやの御じひにすがることに候。

光陰過ぎ易し、もはや三年と申は經にけらし、おもへば實にも頼み無の世にて候。

さあれ大みおやの無限のかぎりなき生命を我等に興へたもふ我等はかぎりなきいのちを我命として下さる大みおやの御子にてあるとあもへば有がたくぞ感じられ候。

○

うけたまはればこのころは大きにかいほうにて、はたけのおしごともなされ候とのこと、よろこばしき事に候。あさひののぼるすがたにも、また、そらをとびゆくくものなかにも大みおやのふかしぎの御はたらきのほどを、しんじられ候。何はともかくも、大みおやの御めぐみが、つねにこのみにふりかゝりあることを、有がたくおもふてはよろこび、たとへこのよのいのちはかぎりありても、大みおやよりいたゞきたるいの

ちのかぎりなきをよろこび、ねてもさめても、大みおやのありがたきことをおもふては、しやうみやうし、たゞ〳〵、

大みおやとはなれぬやうに、念佛いたして、日を暮し夜を明かすことがありがたくぞんじ候。

○

其後如何被爲在候哉御無音に過し多謝候、愚納十月初旬より靜岡教區講習會に頼まれ越後國を十月三日迄にして淺川より東京を經て富士山麓大宮町に至り候、其れより三河より歸京二十二日は兼て御話候時宗の書の大本山當麻無量光寺に至り候。愚納は光明主義を本として淨土と時宗とを兼務候、恰も此頃の稻の如くに草の方は一日〳〵に枯稿に向てゆくなれども、果實の方は活ける力へ〳〵と成熟する。草は枯て再び蒼靑とは還らぬ、實は成熟するに隨て活て來るから來年苗として綠々と生る。むかしの淨土宗は稻草の如くに年々に枯る氣節に向てゆく、光明主義の實は活る方〳〵に向て何れ幾世紀の後には立派に活て來るに違なしと信じて一心に如來さまに奉仕いたし候次第に候

當麻山は光明主義の支部に過ぎぬ、本部は無量光如來の在ます處にて候。願くは枯ゆく草をも大事なれども將來の當に芽發せんとする光明主義の宣傳に力を注ぎて下され玉へ、一人でも餘計に活きんとする信者を造て下され度候。

三人の新發意の菩薩の爲に

如來の聖容を拜寫して御送申こと大に延引と相成へとも此に添て御送申候間落手の上御わかち下され度候。

先は當要如斯御座候。　和南

○

このごろはいかゞおくらしなされ候や。

大おやさまはふかい〳〵をじひにて、しばしもひまなく、こをあはれみたまひてござ

ることをわすれなされて、そうしてゆめまぼろしのやうなことなんぞをおもふて、ひをくらしてをつたのでは、をやさまにめんぼくありません。

むのう上人のをうたに、

うちむかひみなをよべどもよそごゝろ
てらすほとけのかたぞはづかし

このこゝろは、なむあみだぶと、あなたのみなをよぶから、あなたは、をう〳〵とよろこび、じひのまなこをそゝぎてみたまふのに、なんのこゝろはほかのことをおもふて、あなたにはようはありませぬといふようなかほをしてをつたのでは、ほんとうにあなたにたいして、　はづかしいといふことなのです。とまれ、よろづのことは、すべてを、大をやさまにをまかせして、そうして日々のすることが、みんな、をやさまからの、をふせのつとめとおもふて、よろこびいさみて、つとむれば、をやさまのをぼしめしにかなふ。をやさまを、およろこばせ申すことは、やはり、じぶんもよろこばるるではありませぬか。

かなしいことでも、やはり、をやさまをたよる、ごほうべんと存ずれば、やはり、ありがたきことになる。をこつたり、ないたりしてはいけませぬ。をやさまにきまりわるいでせう。

○

量りなき壽の御名をたたへては
先づあら玉の年をことほぐ

舊冬御別れ申してより途中大に暇取れ漸く二十六日歸京候。例によつていつも御無音の段多謝候。外は寒風肌を裂くにもこゝろは彌陀の暖かなる慈悲の懷に在り、日々雪の空あいにてくもり勝なるにもこゝろはいつもはれ彌陀の光明中にあらまほしく候。

西行法師の「世を捨てて身はなきものとおもへども雪のふる日は寒くこそあれ」彼の西行法師は世を捨て身をなきものとおもふと云ふ。我らは、

彌陀に御任せ申してからは、我身ではなく、アナタの物である。また世を捨たではなく彌陀の光明の中の世にて我等はみだの給物なる我身、寒さもあつさもあなたのよろしきあなたの御圖らひにて此世にありし身、

此土の一日一夜は淨土に於て百歳するよりは勝れたりとの事なれば、寒きもあつきも中々容易ならぬ時間なれば成べくむだにせぬ樣にして而して有緣の人々に如來光明を讃美して共に唱し共に歌ひ共に讃美し共に法味を味はひ共に悅び共につとめ、一生懸命につとむべきをつとめ行ふべきを行なひして居れば、作す業の爲めに、心がはいるから寒さあつさを感ずるいとまなく候而してつとめらるゝ丈けつとめてつかれてくればまた快よく眠られることにて候。

自分の事をおもふといろ〳〵の苦も惱も胸の隅の方よりいくらも〳〵湧出して來るから、たゞ〳〵如來さまの方をのみおもふて我をわすれて念佛し讃詠して居れば、しらず〳〵佛と共にはなれぬように相成候。佛と共に居る心が卽ち一分の極樂にて候。何はともあれたゞ〳〵佛と共に在らんことをこそねがはしけれ。

○

光陰過ぎ往く事最疾く既に本年も秋過ぎて初冬を迎ふ時と相成りぬ。人間萬事皆夢幻唯須らく常住無爲の道を求めて眞に入るにはしかじ善導大師曰く「三昧無爲卽涅槃」と。此意は若し人念佛三昧に入ぬれば其精神は卽ち彌陀同體の心證なれば深く彌陀三昧に入る時は自己と彌陀と精神的に一體と成る然れば卽無爲涅槃は卽極樂の事なり。極樂とは阿彌陀如來在ます處。一心念佛して彌陀と離れざる心は其念卽ちみだと共に極樂に安住するなり。假令身は娑婆に在りても神は卽淨土に安住するなり。故に三昧卽涅槃と讃しなされたのと信す。

此心の外に往生する體なし。此心の外に成佛する躰なし。一心念佛して彌陀と合一す卽ち此心なり。一心に佛を念する故に此心卽ち佛となるなり。されば觀經に是の心佛を作る。是の心是れ佛なりと。往生と云ふ事は死ぬ事に非ず。彌陀に助られしすがたなり。彌陀に助けらるゝと云ふは、彌陀の光明を獲得したることなり。光明とは如來の靈體なり。靈體卽ち本願力なり。本願力とは卽ち念佛なり。念佛する故に此心佛と成るなり。念佛とは例へは香を衣に染る時は衣もまた香ふが如し。佛を念ふ時は我心も佛と化す。

我心佛と成る時は宇宙悉く佛境界となる。例へは青眼鏡を以て見る時は萬物悉く青色と變すが如し。佛を念して佛心か我に薰染する時は我心卽ち佛と成る。何そ夫れ疑はむ。唯自から念佛して其眞なることを信知し云へ。

本尊樣を拜寫する事にかかりまた人は來るし、つい〳〵御訪ね申事出來ませぬので失禮いたし候。此頃は云何の御容子て有ますかうかゞひ申候

大おやさまの大きい〳〵おじひを力にして、すべての考へや思ふことを、みな、大おやさまにあげてしまつて、

大おやさまの御じひをもつて、心の中に一ぱいにして置くように、のぞましく候。

いつかも申した、心が如來さまの方へ向て居る時は、いつぐも、光明であかるいありがたい、うれしい、まんぞくである。其反對に、如來さまを背にして居る時は、闇い、目かげの方へ向て居るからくらい、くるしい、いやな、胸のうちがくさくさしたり、不足の念にみたされてしまふ。

丁度天道さまの方へ向て居方は、いつても日向で、うしろはいつでも、日かげであるようなものである。こゝろの天道さまは如來さまである。

むねのうちに自分でしきれぬ時には、大おやさま〳〵と御名をよびて、おやさまの御じひを仰ぐときは、忽ちむねのうちにおやさまが御はいりなされて、而してむねの內をぐらくにして下さる。

實は極樂といふ處はどこかと云へば、如來さまのまします處である。であるから自分のむねのうちに、御じひのおやさまがましませば、ほんとうに、むねのうちがぐらくである。それと反たいに、むねのうちに、ぼんのうの鬼が、かつと、まつかの赤鬼

のように、瞋恚のほむらをもやし立て、己れとつて食てしまふかと云ような、こゝろに成ると、實に恐ろしい鬼を成る。またうらめしざんねんの青鬼が胸のうちに角出して人につきかゝる時は、青鬼である。

胸のうちに大慈大悲のおやさまが、光明かくやくとして、我心を照して、ありがたさいはんかたなきすがたは、實に其心のさまは、觀音ぼさつと同じ事である。

觀音さまは御つむりの寶冠にあみだ如來を戴きて御座る。それは心に如來さまを忘れずして憶念して居るこゝろである。手に蓮華をもつて居るのは、念佛する人の心は蓮の花のごとくであるといふ。蓮は、どろの中より出でて、濁りにそまずして、きよくいさぎよくうるはしくかんばしい。念佛する人のこゝろは、ぼんのうのなかより、ありがたい、きよらかな、かうばしい、ほんとうにいさぎよき、花のようであるといふたとへである。

悦こびなされ。此たび彌陀の本願にあひしことを。御慈悲の親さまは、むかし〳〵より、迷の子どもをあはれに思召て、やる瀬なくいませしも、ほんに我等のあさましさとはしらで、迷に迷ひて、はてしもなき二十五有の苦のなかに　ありながら、なをあきたらず、今もたゞ〳〵うか〳〵と、眼の前のことにまぎれて、明けても暮れても、今日も空しく暮し、今夜もいたづらに明かし、ほんとうに心の底から、親さまをしたふ心もいでず、此身を忘れて御恩報謝のつとめをもできず、どうか、しばしのほども御慈悲のふかきを念ひ、光明のなかをでぬように、暮さんことをこそ、ねがはしく候。

○

さて何は兎まれ如來さまの御じひがます〳〵世の人々にしらせまほしへ候のみ。

それでも到る處に御じひをよろこぶ人々の追々に出來ることはまことに悦ばしき事に候。

何れ御地にいたりて種々また申上べく候。

月日の過ぎゆくことはすみやかに、いつの間にやら、もはや今年も秋とはなりぬ。只々大々おやの御じひのありかたさをおもふて、日々に稱名のほか之なく候。先づは御面語にゆづるべく候。

○

このごろすこし、すゝしくなりました。

おからだのごようすはいかゞてあります。

ひさしく御ぶさたいたしました。

なにごともみなゆめのよであればたゞ

おやさまのおじひをおもひて、御ねんぶつをとなへ、それから、じぶんでありがたいとおもへば、またよのひと〳〵にも、御わけ申して、ともに〳〵よろこび、ともに〳〵すゝむようにすれば、やはりありがたさもすゝむように相なり候。いづれ御めにかゝりしうへにまたおじひの御はなしをいたしませう。

○

實に本春來の御修繕につきては容易ならざる大事業御熱誠の加はるべき處に、佛天の力は加はる事、こゝに至り候ことを思惟すれば、まことに有難き事に存候。

御堂の清く改ちたまると共に擅信家の信仰心のいよ〳〵新たにしてまた新たならんことをねがはしく候。

惠心僧都の御詠に

法の身の月は我身を照らせども
　無明の雲のみせぬなりけり

如來の皎々たる滿月は永しへに照らしませども、信心の眼が開けぬほどは見へぬなり。

法然上人の「あみだ佛と申すばかりをつとめにて淨土の莊嚴見るぞうれしき」如來はいつでも此處にましますけれど一心不亂に念佛三昧修して心が發げざれば光明に觸ることはできぬ。

けれども太陽は見へねども、信心の夜か明けて、日光のなかに明し暮しする人は、同じ光明生活、實に有難く存候。

○

「あみだ佛に染むる心の色に出でば、秋の梢のたぐひならまし」との宗祖の御道詠をおもはざるをえぬ。秋の頃ほひしぐれにあふ毎に、野に山に黄に紅にます〳〵濃厚を爲すを見るにつけても、私共に、

大おやの大慈光の爲に染まぬこゝろの愚かさを、いかにも慚愧に耐へざることに候。

其後は打絶て御無音にのみ過し、心には常にかゝりつゝあれともなか〳〵に忙しなさにつひにおこたり候。

皆様、大慈光裡にます〳〵御すゝみなされ候ことならむと存し候。

大みおやのじひの乳に育まれて、宇宙またとなき、

おやさまの麗しき御容に接して、親しく親子對面の出來うることの得さほしさよ。

みおやのみむねはしばしも子にかゝらぬ時はなかりしも、子等かこゝろの頑是なさ、只目の前の徒ら事にいそしみて、みおやをおとふことの薄さは、まことにおもへは恥し。

世に親の手を離れたる子ほど憐なるはなし。全く親いまさぬことなれば是非もなし。

みおやは子等をおもふ切なる、しばしも休らふいとまなきに、そのみむねを御惱まし申ことの勿躰なさよ。

大みおやのみむねをやすめ奉らん爲に、常にみむねにあることを表はして、聖名を稱へんことをこそ。

○

おてがみかたじけなく候。

うけたまはれば、ごゐんきよさま、ついにごせんげなされしとのこと、じつにむじやうの風は、いつ何時たれのみのうへに、ふきくるかわかりませぬ。せんじつは、よほ

どさくねんとはかはりてはおるものの、それでもかへりにあふことのできぬみの上になるとはおもはざりし。らうしやうふじやうなれば、いつのあらしに、わが身ふきゆるかとおもへは、いのちのとぼし火も、たのみなきものにて候。

さればこそ、ねてもさめても、はなれてならぬのは、大みおやの御じひのみにて候。

御じひのふところにすむ身は、それでもあんしんなものにてあり候。あなたも、申までもこれなく候へども、大みおやのじひのふところにある身、つねに、じひのちぶさをふくめらるゝ稱名を、はなれぬようになされたまへ。

鳥跡光

思ひ出

渡邊信孝謹話

大德辨榮上人の御事を申し盡すことはなか〳〵六ヶ敷い事である。上人の大事とされるところは自分達にわからず、我々が非常に感じた事は上人からいへば何でもない事なので上人について兎やかう申すことはかへつて德を汚すことゝなりはしないかを恐れるが昔御敎をうけたことの二三を御話ししやう

釋尊が遺敎經に自分の滅後はかやうにして修業をすればよいといひのこされ。その儘を行ひさへすれば、御在世の時と同じわけであると仰せられたやうに、上人の敎へのまゝ一心に念佛を申せば卽ち上人と共にある事となるわけであるが、懈怠がちで申譯がない生身の佛大慈悲のかたまりでゐらした上人のおそばに居る時は自づとその光にうたれて、念佛の心と化されてしまふ、不思議な力をもつて居られた、

同じ言葉を仰つしやつても上人の申されることは、人の肺腑までつき通つてひゞくのは全く念佛の實修によつて鍛えられたからである。いくら學問をしても底力ある親切は出來ぬ丁度金つちでたゝくのと箒でたゝくのと響きがちがふやうなものである。

上人は一般の人と修業のため御供してゐるものとに別けて話された事が時々あつた。それは人によつて法を說かれたのである。

自分は初め雲照律師について坐禪をしたが後に今の知恩院の管長である、其頃芝の增上寺法主であつた山下現有上人の德者であることをきいて芝に御たづねしたら、「法ならば辨榮和尙にきけといはれた、山下上人の申される程の方ならばぜひ御目にかゝりたいものと聞いたその日、東京を立つて美濃に御巡敎中の上人をたづねた、その時一所に參つた人に今井といふ人がゐて、淨土宗の僧侶で、豪傑肌の人でかねゞ〳〵支那に渡つて布敎する考へをもつてゐた。上人と御問答するつもりで來たのである。

所は大垣の圓通寺、通されて上人の前に出た、今井は自分の志をのべたので上人

「どうして支那へ布敎に行く氣になつたのですか。」

「日本に念佛を敎へられたそのもとは善導大師でありますその恩に報ゆるために支那にいきます」

「それなら支那まで行かずとも日本で念佛を申せばよいでせう」と申され今井は

「日本には僧侶がたくさん居りますから」と申上げると

「日本にそんなに僧侶がゐますか」

「たくさんゐます、」

「日本のどこにゐますか」この問に閉口しまつた上人かさねて

「淨土の僧が澤山ゐれば結構ですが、どこにゐますか、どんなものが淨土の僧ですか」今井はだまつて仕舞つた。

「頭をそつて衣を着てお經をよむのが淨土の僧ですか」

「……」一言もない、

「そんなものなら、何も心配はないが眞に念佛を申し念佛に生かされてゐる人が幾人ゐますか、あなたは相當に學問もしたでせうが念佛の尊いことを知らない。しかも支那へ布教するとはもつての外である。先づ自分が、念佛の有難さを知らねばならぬ念佛の修業をなさい。一心不亂にあみだ樣に此身もさゝげて、我をなくしてしつかり念佛になつて仕舞はねばならぬ、念佛で鍛へなさいなまりのやうなたましいではだめである、一心に鍛へ上げて後はどこへいくもよろしい。同胞のうちに苦しんでゐる人がいくらあるかしれない、先づ足元から救はねばならぬ、正宗の刀はなぜ切れるか、それは鍛へがよいからである、人間でも同じである、よく〳〵鍛へねばいかなるものにむかつても切りひらく切れ味は出てこない」と淳々と三時間餘にわたつて說かれたのであつた。今井は今まで諸處を問答などしてあるきましたが、あなたのやうな說を聞いた事がありません初めて承はりました成程お說の通りです、どうか修業いたしますから指導をして鍛へて下さい」と、承知された。それから自分の方をむいて、

「あなたはどこから來ました」とたづねられ、

「私は芝にゐて山下上人の弟子である、居士としてすでに式をしてもらひましたが山下上人にすゝめられて今井と一處にまゐりました」

「いま申した事がわかりましたか。一心にまつしぐらに念佛を申せば佛樣が適當な御用をいひつけて下さる。身も心もさゝげで佛樣に歸命しなさい」と諭された。二人は修業のために上人の御供することゝなつた、どうして念佛を申せだよろしいかとおたづねしたら、「一心に念佛を申すには一ヶ月乃至二ヶ月程づゝ時々山に入り、他の事に心をうばはれぬやうにして一心に申せ、食料はそば粉をもつていけばよい、これはすべての人にすゝむる事ではない」

と申れたので或は妙義山筑波山富士山等にまゐつて、一二ヶ月申しては上人の許にかへり〳〵した。

上人に御目にかゝつても只「よく申した、まだ〳〵一心に申しなさい」といはれるば

かり、一向に修業中の事など御たづねにならない、念佛中に感じた事など尋ねられたらこう答へやうと心にかまへてゐてもつひぞ尋ねられた事がない、こちらから「上人こんなことがありましたこれはどうですか」と聞くと「ふむ〳〵」と聞いてゐられて一心にはげみなさいとばかり、もうそれでよいとはちつともいはれない、低いところで滿足せないやうとの御心である、

上人の御德は益々世に知られて、次の年の御巡敎の日割まですつかりきまつて一日の御暇もなくいそがしかつた、說敎をなさる、佛畫をおかきになる又米粒名號を御書きになる、それを紙につゝむのが自分たちの一つの仕事であつた、自分が伊吹山で念佛を申して上人の所に歸つた時であつた、上人いつもの通り米粒を左の手のひらにのせて同じ左の親指と人さし指で掌のをとつては書き〳〵して居られる自分は御室に入ろうとしてふと隣室から見ると鼠が二匹、一は上人の手のひらに、一匹は膝に上つて平氣で米粒をたべてゐる、自分は驚いて仕舞つた、そつと室に入ると鼠は忽ち逃げてしまつた、その時に自分はあゝ動物まで上人をしたふかと眞に上人のえらい事を知りました、

「上人今ねづみがゐましたね」「うむ居た」「なぜ私が來たら逃げたのでせう」く御尋ねしたら「それはお前がえらいからだ」といはれた、そして「鼠と遊んだ事は誰にも云ふな」といはれたこれは岐阜の縣會議員などしてゐられた篤い信者の青木清三郎といふ人などもよく知つて居られたもう故人になられたが非常に上人に盡された方である、又縣會などでも重くみられ青木氏が居られねば如何に多數でも事が定まらなかつたそうである、上人はつねに、青木の傳記をだれかに書かせたいといつて居られた。

上人の德はあまねくいかなるものにも行わたつて居つたのでどうなものでも上人を慕つた、犬など上人に吠えたことなど一度もない、或時上人の御供をして道を通つてゐた近道をしやうとして「上人こちらへ」と申すと、「そちらへいくな」「こつちがちかいですから」「いやそちらには蟻がたくさん集つてゐるからいくな」と申される、自分に

はそんなものはちつとも見えないので、「どこにゐますか、」「むこうに」といはれるまゝにいつて見ると果してそうだ、すぐ引かへして上人に追ひつく、と「お前は疑深くていけない」といはれた、上人は不思議な眼力をもつて居られた、七八間むかふにはつてある新聞の字などよく御見えになつた、

「明日は何時の汽車でたとうかと仰つしやつて何時何分のと何時何分のとあると云はれるので上人時間表をおもちですかといへば「いやもたないがむかふに張つてある新聞にかいてある古くてもそうちがつては居ないだろう」と申されるのでびつくりした事があつた、こんな事は人のゐるところでは決して仰らなかつた。

自分が山に入ろうとした時、上人がお師匠さんをつけてやるから一寸待てといつて十分間ばかりで阿彌陀樣を書いて下さつた、大そう有難く出來てゐたので大切にして、山に入る時はいつもお供をした、自分が支那に居つた時、甥にもつて來ろやうにたのんだので錦の袋に入れてさも大事そうにもつてゐたものだから、途中朝鮮あたりですりに取られて仕舞つた、そのことを上人に申上げると「いや又どこか御因緣のある處で御結緣になるからいゝ」と申された

なまけ半分にぐづ〳〵念佛を申してゐるのは決して御よろこびにならなかつた、そんな人をみて自分が上人に「上人、あんなにしてよろしいですか」とうかゞふと、「あれは丁度子供が杓にもとゆいをつけて三味線のつもりでびん〳〵いはせてゐるやうなものだといはれた、

「それでは何にもなりませんね」と申すと「いやあゝしてゐる内にやがて本物をもつとその骨を覺えるのもひとりでに早いわけだと仰せられた。

雲照律師のところから弟子を手紙などつけて仕込んでくれと申してよこされた、すると、上人は念佛を申すも、座禪をするも結局同じだから一心に念佛を申しなさいと念佛の申し方を敎へて山に入つてやるやうにすゝめられたがそのゝがいつまでも上人のおそばに居やうと何とも、申されなかつた、

行誠上人は上人を見出し、指導された大德である、上人が淺草の誓願寺に止まつて居られた時分（印度へゆかれる前に）芝から車に唐紙を一ぱい贈られてこれに何でもよいからなるべく半年位で書いて仕舞ふやうにと申越されたといふ事である。

行誠上人許には各宗の僧侶が敎をうけに集つた、近藤祐子氏もよく行誠上人を訪ねられた。或時祐子さんに未だのもしい小僧を一人ひろつた、あれは將來佛になるか菩薩となるか　多分佛になるだろうがどんなにえらいものも、よい信者がつかねばならんから、一つあんたが信者になつてくれと申された」その小僧といはれたのが卽ち辨榮上人だつたと、

上人が印度から歸られてから一部の人の間に上人を智恩院におむかへしやうとして運動を企てた信者があつた、この事を先づ上人にはかると、「いや私は天下の黑小僧にしておいてほしい」といはれるのでなぜですかといふと、「行誠上人がおまへは天下の黑小僧になれといはれたから」と、その當時上人の眞に偉大なところを見拔いて信者になつた人は少くない、が、又山下上人、行誠上人、南隱禪師、雲照律師などの諸大德が上人の只人でないことを看破して固い信者に辨榮上人を紹介せられた

夜はよく熟睡なされて睡眠時間は至つて短かつた、夜中に時々「なむ」とかすかにはつきりと寢息の間からきこえたその御聲は實に何ともいへぬ有難い感じをあたへられた、上人はもう身も心も念佛そのものであつた、

岐阜の或尼寺にお供をした時、上人の御室は便所のすぐそばでみながどや〳〵と用たしにいくのでくさくて〳〵たまらないそこで納骨堂の傍に細長い室が有たから上人に「上人あちらへいきませう」「なぜ」「便所がくさくてたまりませんから、」「自分はちつとも臭くない、おまへはなぜ心を極樂の園に遊ばせないか、便所の臭氣に心を捕れてゐるからだめである、極樂の公園に心を遊ばせておけば、いやなにほひも何もせない」

上人は常に只念佛を申せ〳〵とすゝめられる阿彌陀經の他を說かれぬので「上人あな

たはなぜ阿彌陀經ばりをとかれるのですか、」ときくと、「阿彌陀經は幾代生れかはつてもこを說き盡すことが出來ない」

他の本を讀む事をすこしも勸められなかつた、眞宗の人で法華經をといたのがあらはれて、新聞などに廣告をしてゐるいかにもよさそうである自分はほしくて〳〵たまらぬが買ふにも金が無い、上人にもらはうか他の本をよむことをよいとは云れんかも知れぬなど思つて言い出し得ずにゐた、するとむかうから「法華經出てゐるね」「はい新聞などに盛に廣告してゐます、」「ほしいか」「はい」それでは買ひなさい」とて定價六圓下さつた、うれしくてすぐに買ひにいつた、定價より一割引いてくれたので六十錢あまつた、これのこしておいてもつまらぬからつかつて仕舞はうと思つてもう隨行して一年ばかりうまいものをたべぬからとうなぎ飯どぜう汁をたべたまだあまるので燒鳥も取つた、そこですつかり口を鹽ですゝいで歸つて上人の室に入らずに次の間から「只今かへりました」「買つて來たか」「はい」「念佛にうんだ時それをみて、又それをみる爲に念佛をはげむやうに」といはれた、其夜はすんで翌朝、上人の御そばにいくと、うなぎ飯はうまいか、といはれる「もう一年もたべませんからほしくもありません」、「一ぱいで足らないだろう二はい位だべられやう、燒鳥はどうか」などきかれるので「上人どうしてそんな事をいはれるのですか、」「念佛の修業にはあんなものはたべぬがよい」「上人私がゆうべたべた事を御存知ですか」「それはお前の腹の中にあるからよくわかる」自分は實に冷汗が出た「實は六十錢割引しましたから、その金でたべました、どうか御ゆるし下さい」とあやまつた。上人、

「たべたからといふ事はない、只淸淨にして念佛を申すやうにつとめねばならぬ」

人はみな上人の不可思議をいふが自分はどうしてもそれが信ぜられなくて何百遍となく疑つたするとこうした事でいつも度膽をぬかれた、

お供をしてゐると諸處で自分にもお布施を下さる、上人に「これはどういたしませう」と申すとそれは阿彌陀樣におかへしなさい」といはれるので立つ時本堂にいつてお賽

錢箱に入れておく、金はちつとも所持せなくても實に佛樣に仕へて居れば必要に應じて何處からか佛樣が下さるのですべてに於てつひに不自由を感じた事がない、

宮川如々居士といふのがあつた初め熱心なクリスト信者で大阪に會堂をもつて盛んに傳道してゐたが諸處で上人の評判が高いのを聞きいつはつて他人の名刺をもつて上人にあひに來た、

「上人は極樂においでになつた事がありますか、念佛を申して極樂にいくとはどういふ事ですか」すると上人、

「あなたは天國へいつた事がありますか」

「いやわたくしは無宗敎だからわかりません」

「いやしくも法を聞き、法を說くものがいつはりをいつてはいけません、天國をとき極樂をいふことは出來ません」上人にクリスト敎の信者といふ事を看破られて恐れ入つて實の名をあかしそれから熱心な念佛行者となつた、

名古屋の竹屋といふ信者の家に招待せられた時、初めの日は三十人位だつたが翌晩は八十余人もその家につめかけて御法話をきゝにきた、非常にもてなされて夜などは仕立おろしの立派ら夜具を敷かれる、上人「木綿ので結構です」といはれたが「どうかこれを御敷下さいとて自分にで敷いて下さつた、自分は勿體なくて仕方がない國元の老ひた兩親はおもい木綿にくるまつてゐられる事を思へば勿體なくてなど考へてゐると興奮してねられない「こんな贅澤なあつかいをうけてはとても修業は出來ない、明朝上人に默つて逃げ出そうかなど考へてゐると「拙堂」とよばれた。「はい」と飛びおきてみるとあひかはらずすや〳〵と靜かにねてゐられる。自分は上人の寢言を初めてきいたと思つてまたいろ〳〵のことを考へてゐると又「拙堂」「はい何か御用でございますか」きいてもやはりすや〳〵とねてゐられる、その內夜もあけかけた又も「拙堂々々」「はい上人何か御用で」しばらくしてから「今歌をいふからきけ」といつて

我はただ、佛にいつかあふひ草
心のつまにかけぬ日ぞなき

の御歌を三度くりかへして何をつまらぬ事を考へてゐるか、それよりなぜ念佛を申さぬとおつしやつた

上人にとつては金殿玉樓も賤が伏屋も何等かはつた事もなかつた、それか眠つたと見えてふと目をさました時は上人はもう起きて洗面もすませてゐらした

上人は朝は三時には起られた夜も十二時になる事か多かつたそれで大がいの隨行者は一週間とつゞかない「用事が出來ましたから」と申して離れて仕舞ふ、上人「夜ふかしをすれば用が多くなるといては笑はれた、一年中否一生涯を通じてかゝる生活を上人はつゞけられた

又上人があくびをなさつた事を一度もみた事がなかつたそれを上人にたづねると「あくびをするひまがあれば念佛を申す」といはれた

どこへ行かれても始めは煙草をふかし半分に御說敎をきいてゐる人が多い、しかるに上人は少しも頓着なく熱心に段々坐蒲團をすべつて懇々と說きつゞしまひには膝と膝をつきあはせる位になるのも知らずにお說になる、そこで人もいつか膝を正して眞劍にきくようになる、眞心をもつて人の眞心までつき通してその眠つた佛性をよびさまさずにはおかれかつた、

一寸他の世間話でもしてゐると「小水もつねに流るゝ時は石をうがつ、油斷をしてはあみだ樣にふれる事は出來ない」と御いましめになつた

上人をたづねて來た人がどんなにつまらぬ話をしても心から「そうですか」「あゝそうですか」と聞いてやられた、そこで自分が上人にあんなつまらぬこと御きゝにならぬがよいといふと、むこうが利用すればこちらもむこうを利用する「おまへのいふことは違ふ」といつてしまへばもう二度とこなくなる、こうして幾度もきゝにくる內に法緣が結ばれるから」と申された、

上人のつねにすゝめられたことは只一つ、一心に念佛を申せといふ事であつた。よく申された「おまへが九州から初めて東京に上るのに大阪まできた時に人が『こゝが東京である』といへば成程そうかと思ふだろう、又靜岡を『こゝが本當の東京だ』といはれゝば成程と思ふ、眞實の東京をしつてゐるなればだれが何といつてもどこを東京だといはれてもそのちがふ事がはつきりわかる如く、先づ修業して極樂を知らねばならぬ。大切でもない途中の景色に心をうばはれてはいけない、先づ阿彌陀樣の御許にいかねばいろ〳〵なことに迷はされて仕舞ふ」と申された。（某女史筆記）

辨榮上人の印度佛蹟巡拜

村山清作述

同上人の印度佛蹟巡拜に就ては目下多くの年所を經て何人も充分之を知悉せらるる事少しと思ふに就て、田中木叉先生より御依頼があつて私に何か當時の事情を知らして呉れと云ふ事でありましたから、左に其の一二の事項を御話致します。

夫れは、私は同聖人が渡天の時、丁度印度のセイロン留學中であつたので、其處へ第一私を訪ねて上人が見えたのであります。無論聖人は、英國語は御承知でないから、同聖人の佛蹟御參拜に就て私が色々の便宜を御計りすることになつたのであります。

隨而同聖人の印度佛蹟參拜の事に就ては私の外に誰人も知る者無い事と信じます。

而かも此事は同聖人御在世中の一大記念すべき事蹟と存じます。

けれども最早や多くの年所を經たので、今私の記憶に新なるもの二三の外無くなつた事を非常に悲しむのであります。當時私はセイロンのコロンボ在ウエラワッタのバーマンカダのシンハリーズの貴族で大變熱心な佛敎信者のマダム、ウイラクームといふ人の家に止宿して、かレッヂに通學致して居つたので、兎に角そこは同聖人をお迎へしてそこに一週間許り御滯在を願つたのである。

そして其處から私が通學の余暇、當時同島に於て最も有名なサイアム派の大僧正スマンガラ師を訪問したり、キャンデイーの佛牙精舍に參拜したり、其他博物館圖書館學校並に敎會寺院等を廻覽したのであります、其の内、スマンガラ大僧正と會見の際同僧正から色々日本佛敎の事に就て聞かれたこともあるけれども、同聖人は餘り多くを語られなかつた。唯いつもにこにこ笑つて、先方の容貌や動作や其他を見て笑つて居るに過ぎなかつた。

私が其の間に立ちて取り繕ろひをした樣な事で、同聖人が少しも、そんな際でも何等心にかけて居られなかつたと言ふ事は、今に於て始めて同聖人の虛心坦懷の高風を偸ぶのである。

キャンデイーの佛牙精舍に參拜の際は、特に私から請ふて、紫の衣、金襴の袈裟、そして錦の頭巾を御著せした。それも喜んで之を著けられて、汽車に乘り、他の各國の人々の間に伍して、常に恰も無邪氣なる小兒の如く、にこにこ笑つて、殆んど胸中に何の蟠る所もなく、言葉の通ぜない、事情の分らない外國に來て居るといふ樣な氣分の見えないことは、誠に偉大であつた。其の時同乘の或英人が、我々は今日本の美術品を見ると嘲つたから、私は直に之に答へて、君等の方のケンターバリーの大僧正はどんな風をして居るのかと言ひましたら、彼等は赤面致しました。其時聖人は、何を言ふて居るのですか、と聞かれたから事實を話しましたら、それは面白く出來た、と呵々大笑された。それから先方のキャンデイー驛に著いた所が、異樣な風采の爲に、土人の老若男女が周圍に集つて來て、色々樣々の批評をしたり、或は衣の袖にすがつたり、下駄にさはつたりするのを、少しもうるさがらず、常ににこ〳〵と笑つて、眞に無邪氣の小兒の狀態でありました。佛牙精舍に參拜して特に、容易に開かないその佛龕を開扉して貰つて懇ろに之を拜しました。斯かる場合通常人に見ることの出來ない、姿容をあらはして眞に三千年古の釋尊に會はるるが如き有樣を呈せられた。それから同地の有名なるボタニカルガーデンに車を驅つて、同園に於て熱帶地方に於ける

珍草奇木を一々精細に廻覽して非常に喜ばれました。其他到る處眞に無邪氣で多く語らす、非常ににこやかに笑つて居るに過ぎませんでした。

同島を去つて大陸に渡る際、汽船中に於て洋食は如何にと私が心ひそかに心配して居つた所が、豈斗らんや少しも凝滯する所なく、普通人より以上に大食されたことには一驚を喫しました。そうして食後には其の食堂に止つて、色々の花鳥等の日本畫を畫いて同船の英米人や佛人に之を請ふが儘に與へられて居つた。隨て婦人子供などは常に同聖人の周圍に集つて嬉々として話をするのが常であつた。就中例の米粒に六字の名號を記し或は百人一首を記したりして各人に與へる爲に、遂に日本の奇僧として船中の大評判となつた。カルカッタに上陸して某ホテルに入つて暫時休憩した。當時カーネルオルコット氏と共に神智敎會に働いて居つた、ダンマパーラ氏に面會して同氏の紹介で、ブルマの前國王邸に伺候した色々話の末、晩餐の饗應を受けた。所がそれが悉く豚の料理で數十種に上つた。それを悉く平げてしまつた。

あとで國王のいふのに、今まで日本人や其他の各國人が色々見えたけれども、この豚料理を全部平げた人は此の奇僧が始めてである。と笑はれたことがある。翌日、釋尊始成正覺の靈場ブッダガヤ參拜を致しました。其時、同佛蹟を管守せる、ヒンヅウ敎の敎師に面會し。色々談話を交へたことがある。同夜は靈場に通夜をして、ブルマ國王のバンガローに留まりました。然るに其の夜土人から供養をされた牛乳と及びブーナと稱する一種の食料品にあてられて非常に腸を害せられて遂に翌朝は立つこと能はざるかと心配して居つたが、翌日天明と共に全く恢復して其處を出發することが出來ました。それから鹿野苑祇園精舍拘尸那伽羅等巡拜致しましたが、此の間別に左して記すべきものはありませんでした。大陸を去つてラングーンに上陸して同地の豪族某氏を訪ね、同地の有名な金塔寺に參詣し、植物園動物園等を見て、そうして或る街に入つた所が其處は日本の醜婦の巢窟であつた。其の際或る女郎屋の亭主が招いた所が、聖人は平然として其處へ上つて行かれる、そうして多くの女子を相手に色々冗談

を言つたり、更に何の拘泥する所も無く、洒々落々恰も春風面を吹くが如く温顏慈話其の無邪氣なること之また驚くの外は無かつて。晩餐を饗せられて其處を出で、船に乘つてそれからシンガポールに向つた。シンガポールに上陸して一の日本人の旅館に投じて翌日日本領事館を訪問した。當時書記生の豐島捨松氏が非常に親切に待遇を與へられた。同地の植物園を見たり、或は博物館に行つたり、滯在三日程の間日本人の各種の人に招かれて色々の饗應を受げた。所が愈々乘船するといふ前日例の大食の結果が、又非常に腸を痛められたので非常に心配したが、幸に翌朝は無事に乘船する事を得た。それよりサイアムに立ち寄る筈であつたけれども船の都合で中止して香港に向ひました。香港の領事館に領事を訪問した所が。丁度其際日清戰爭の終を告げんとする際であつて、支那から李鴻章が近日我國に渡つて下の關に於て例の講和條約を結ばんとする際で、李鴻章も同館に來て居つて、同聖人と共に李鴻章に面會した事がある。滯在二日許りにして直行して日本に歸つたのである。そして私は東京に於て同聖人と別れ、爾來星霜を閲する事幾拾年間、今や聖人此世を去つて、所謂幽明處を異にして此稿を話するにあたり、徐ろ聖人の當時を髣髴する次第である。要するに、同聖人當時は未だ、年齒も若く、多く世間に知られない時であつて、隨而大いに注目を牽く事蹟は此の印度佛蹟參拜中にはありませんでした。けれども上述の通り其の無邪氣にして一點の俗氣無く、行く處として可ならざる無き狀態は到底普通人の爲し得ない所である事を今に於て私は深く敬慕して居る次第であります。

今回突然の事で統一した事を申上げることは出來ないが、他日更に機會を得たならば更に記憶を新にして御報導申上ぐることがあるかも知れません。(某女史筆記)

御逸事

五香善光寺辨誠輯錄

○

上人筑波山中の行をはり玉ひて松戸町一信者の家に來らる。垢面破衣鬚髮茫々として加ふるに虱の繁殖甚し。家婦すなはち之れを焚殺さんとするや上人そを制してのたまはく、「ソンナ事をせずとも裏口の方へ出して於けばテンデに好きな方へ行つてしまふから……」と、家婦愧ぢて止む。

○

上人そのかみ小金ヶ原の草庵に住み玉ふ頃、或る夕暮近隣の農夫來り訪ふ。折しも上人佛畫に餘念なし。農夫乃はち問ふて曰く、「コンナに闇くなつても見えますか、」と上人答へて曰「ハイ見へます」と。「ドン、ナに見へますか」上人洒然として曰く、「闇く見へます」と。

○

善光寺本堂建立に際し衆人その廣大麗美ならんことを希ふや、上人の曰く、「イヤノ〳〵本堂はソンナに立派なのでなくとも只た人々が禮拜する場所さへあれば澤山である。あまり立派にすると多くの人々に迷惑をかけるから……」と。

○

上人印度佛蹟參拜をはりたま〳〵布鎌の地に至らる。時に一老爺あり問ふて曰く、

「上人々々印度へ何をしに行つて御座つたか。」

「ハイ佛蹟を參拜してまゐりましたよ。」

「夜は何をして御座つたか。」

「夜間は山の上で冥想して居ましたよ。」

「ソーカ山には何か恐いものは居はしませんでしたか。」

「ハイいかい恐いものが居りましたよ。」
「どんなものが居ましたか。」
「ハイさぼてんの葉が一番恐ふございましたよ。」

○

上人未だ御若年の時より衆人歸依渇仰して止まず。自ら「お上人」と呼ぶ。東都淺草誓願寺先住石井僧正は上人の法兄に當れるの故を以て初年多くこゝに寄寓せらる。一日座談の序僧正の曰く、辨榮は己れのおとうと弟子だが同行でもすると人々は辨榮のことばかり御上人〳〵と云ふので、マサカ己れも信者への面目上辨榮と云ふ譯にも行かないので、善光寺〳〵と云ふと。」

○

淺草誓願寺御留錫の砌、たま〳〵一行者あり、衆人の喜捨を勸誘して弘法大師の御堂を建立せんとし、來つて上人に寄附簿の序文を乞ふ。上人曰く「私が序文を書くと何か御都合が良いのですか」と。行者の曰く「ハイ御上人に序文を願へば衆人が信用して寄附金が多く貰らへますから、……。」上人更に曰く「デハその御本尊はどんな御利益がありますか」と。行者曰く「ハイこの御本尊は大師自らの御作で特に靈驗著るしく如何なる願でも必らず成就せしめ玉ふのであります……。」上人靜かにの玉ふやう「ハイソウデスカ。デハそんなに御利益があれば何も私共が序文を書かずともその御本尊に御願いした方が早いではありませんか」と。

○

信州某地の惡習慣の中には法要後慰勞の會に藝者を擧げて興を添へしめんとすることもあり。上人曾て彼地巡敎の砌亦このことを爲さんとするや、上人曰く「デハ私もこれから藝者を擧げませう」とてが室に退き玉ひ掛かぐる如來尊像のみ前に香火して恭しく阿彌陀經の訓讀を始め玉ふ。衆人愧ぢてこのことを止む。

○

世に六座念佛なるものあり。今は徒らに形式にのみ馳りて實を失ふこと甚しく、布鎌の地亦盛んなり。上人私かにこれを憂ひ玉ふ。曾て巡錫のついで此附近に六座念佛の流行如何を尋ね玉ふや、世話人得々として答ふる樣「ハイこの邊は一番盛んで私共も亦ソノ仲間であります」と。上人嘆息しての玉ふ樣「イヤソレが誠に困つたことでありまする」と。人々座に堪へず冷汗す。

○

善光寺庫裡破損し雨漏りにて困却しける折、弟子心如これを修復せられんことを哀願するや、上人曰く「雨がもればもらない方でやつたが良からう」と。

○

上人曾て座談の折、一僧侶の曰く。「今日は藝術の世でありますから敎理等を發表するにも藝術味を加へてした方が便利ではありませんか」と。上人曰く「否ナ、現今はソンナ優長な時ではない。鐵を以て鐵を截る如く。まさに血を以て血を說かねばならぬ時である」と。

○

上人の曰はく「一體今時の宗敎家には元氣がない。戰爭でもして行くやうな氣慨でなければ傳道ナンドは出來るものではない」と。又曰く「古來の大宗敎家は幾多の流罪入獄等の憂き目を見て來たのだが辨榮は未だ不德にしてソンナことを經驗しない。」

○

上人或る處にて佛書を揮毫し玉ひつゝありし時、某來り問ふて曰く「上人、地獄極樂はありますか」と。上人平然として筆を運ばせ玉ふこと暫時、徐ろに御顏を上げ重々しき語調にて只だ一言「エイ〳〵ありますとも」と。再び靜かにその筆を進めさせ玉ふ。

○

一日某氏來りて喃々として免囚保護會設置の必要を說く。上人徐ろにの玉はく「ソ

レモ誠に結構なことであるが、兎囚を保護せんことは未であつて先づ始めから囚人を造らぬ様に教へる方が良い。それには少年教　の設置が最と急務です」と。

○

上人一字龍を能くし玉ふ。筆勢凜然として生けるが如く凄壯の氣を帶ぶ。衆人防火の符として之を尊崇す。曾て布鎌巡教の折人々の乞いに任せて急ち數十枚をものし玉ひ、命じて之を縁先きに乾かさせ玉ふに、適々其中に一人の腹黑き者あり、窃かに他人のものと取り代へて家に歸り一室に置く。暫らくにして往き見るに飄々として飛翔し去らんとするに驚き走せて捕へんとするに及ばず。前方に當つて細き流れあり龍字此の中に入ると見るや忽然として姿を失す。杖を以て仔細に尋ねれとも遂に得ず悄然として家に歸へる。

○

布鎌に一婦人あり。或る夏の夕暮附近の川邊にて洗ひ物しけるに過つて墜落溺死す爾後雨降りそぶる夜なんど必らず青き火玉となりて木上を轉々すると稱し人々皆之を怖る。上人御巡錫の砌一同亡靈得脱のことを哀願す。上人爲めに川旋餓鬼を修し玉ふに法要半ばに垂んとする時上人室中を指し玉ひて今亡靈得脱せしことを告げ玉ふに。後日再び出でず。

○

埼玉縣北葛飾那三輪の江村に或る婦人あり。曾て出産の折難産にて呻吟時過ぐるも分娩出來ず。家人親戚等枕頭に集りてひたすら事無らんことを祈る。適々上人の米粒名號を薦むる者ありければ。念佛唱へつゝ清水にて産婦に呑ましむるに嚥て安然として一男兒を分娩す。一同喜び近より見るに右手の掌を固く握りし中に何物かを持てるが如くなりければ、之を開き見るに前刻呑ましめたる米粒名號なりければ、何れも奇異の思ひをなして益々信仰を增進す。

○

上人未だ幼時生家に在りし時より讀書に篤く農事の間と雖も懷中書籍を放たず。一日勞作に出で晝食後の休憩に懷中より四書を取り出して見つゝありしに後方の崖俄然として崩壞し來れり。人々驚き馳せて安否を問ふに、御身は土壤と共に一間餘りも前方へ突ぎ出されしも、微傷だに負はず平然として念佛し玉ひつゝありき。

○

大正某年某月御生地鷲野谷醫王寺に五重相傳傳燈師として御留錫中、夜な〳〵獨り庫裡の内佛前に端座し玉ひて念佛時を遷させ玉ふ。人々密かに之をいぶかる。四日目の夜に至りて、上人一老婆を側近く招き玉ひて尋ね玉ふ樣「その寺に曾て若き婦人の死せるものありしや」と。老婆答て曰へ「ハイこの寺の先々住の奥さんが難病で大そう苦しんで命終られました。」上人之を聞き玉ひ「さうですか。デハ多分それでしやう毎晩私の前に現はれて救ひを求めたのですが最早や浮かばれたでしやう」と。靜かに念佛をつゞけ玉ふ。

布鎌巡錫の歸途信者二等キップを求めて渡す。上人我孫子驛に至れる時、衆人と共に三等室に移り玉ふ。

○

上人の玉はく「人は多く腹八分目等と云つて、その仕事でも十の力あるものは、マア七八分の處で控へておかうと云ふが、辨榮のはさうでない。七の力あるものは八か九のところへ。十の力のあるもの十一のところで働けと云ふ。そうすれば懸命の働が出來る人は何んでも懸命の働きをせねば駄目だ。懸命の働きをしてこそ其の人の人格に光輝を增さしむるのだ」と。後又微笑し玉ひて然し「これも人によることだ」との玉ふ。

○

上人は一部の宗教家のやうに敬して遠ざかられると云ふやうなことが嫌いであつ

た。そしての玉ふには、「これからの宗教家は秘密主義ではなく、公開的になるべく多くの人々に接して結緣攝化せねばならぬ」と。從つてその御教化法も儀式ばつて本堂の壇上よりせらるゝことよりも、むしろ坐談的に膝を交へて教へられた方が多い。特に談しのすゝむにつれては恰も戰場に於て一擊の下に敵を屠らんとする如く、どうしてもその人を信仰に入れねば止やないといつた樣に、覺へずその坐をすべり下りて前方へのり出し給ひしは誰も知る話しである。又會衆と食を共にせられることを好み玉ひ、わけて晩食時等は實に和氣藹々たるものであつた。

○

上人御在世中懷中時計を携帶し玉ひし事なし。侍者一日坐談の序その所以を問ふ。上人微笑しての玉はく「ハア自分は時間を超越して居るから」と。

○

曾て東都に一行者あり。四國八十八ヶ所巡拜前後六回に及ぶ。上人誓願寺留錫の折奉納經を携へ來り得々としてその功德を誇る。上人聞き玉ひ「そんなものが何ですか」と。

○

一修道者あり。寒中單衣にて布鎌教會に來り滯在修行せんことを乞ふ。世話人之を憐み五香善光寺に於て授戒會御執行の折、共に來りて上人に謁し、その歸らんとするに際し、小弟に托して修行者に衣類の施與あらんことを懇願せしむ。上人洒然として曰く、「彼れは先般自分が會ふた時、それでは寒くはないかと尋ねたら、イヤ私は毎年こうして修行を續けて居るのですからと言つたので、思ふに何か深い心願でもあつてさるものかと思ふ故、折角の心願を妨げをしては善くないと思ふから、其儘にして置いた方が良かろう」と。蓋し妄語の恐るべきとその慢心を戒めんが爲なり。

○

某處に一婦人あり。宗教心の必要を認めて隨分諸方に知識を尋ね書物に問ひ相當に

信仰しけるも、未だ徹底的信仰に入らず。常にこのことを歎きつゝありき。適々上人其地御巡錫の折來り謁して己が懊惱を訴へて救度を哀願す。上人聞き終り玉ひての玉はく、「一體宗教は先づ第一にその歸依信賴すべき本尊佛を定めることが必要でありますが、アナタは最早やソノ御本尊が目付かつて居りますか」と。婦人答て曰く、「ハイその御本尊のことに付きましては既に立派なのが購求めてありますので、實は四五年前或る町で御面像と云ひ御裝飾といひ誠に立派なのを購求めて參りまして、日々香華して禮拜して居りますのですが、だうもまだそれ程に信仰が進みませんので、是れは一體どう云ふものでありませうか」と。上人曰く、「ハイそれで了解りました。お話しを聞きますればナルホドさういふ御本尊さんですから駄目なのであります」。「ではドンナ御本尊が良いのでありますか。」上人「ハイアナタの御本尊は人間が假りに造つた御像でありまして、本當の御本尊ではありません。本當の御本尊とは吾れ〳〵の心殿の中に宿り玉ふ、如來の靈應身なので、龍樹天親キリスト善導空海源空等の如き靈界の偉人と云はれた方々は、皆な何れもその心宮の中にこの活ける本尊佛を宿して居られたから、其の人格も高く信仰も常に活き〳〵して居たのであります。そして吾々も亦同じく各自の心宮の中にこの活ける御本尊をお安置することが出來まして始めて本當の信仰も向上も與へられるのであります。佛畫や御木像などは只だこの活ける御本尊を知らせんが爲めの勝方便であります。アナタもだうか是れからは其の御持ちになつて居る御本尊を通してアナタの心殿の中に活ける御本尊を御請待せられますやうに。ソウ致しますれば必らず只今の淋しみが滿たされますことでありますから」と。

上人、爾後兩三年を經て再び其地を訪れ玉ひしに其の婦人歡喜に滿たる面持にて來り拜して曰く、「御陰樣で只今では心殿の中に御本尊が目付かりましたので、日々コンナに喜びと勵みとにくらして居ります」と。上人乃ち白紙に一首の狂歌をものし玉ひてこれに與へ玉ふ。

昨日まで鬼の住みにし胸殿も

今日彌陀尊の御堂とはなる。

○

或るところに一豪農あり。田畑山林數百町を有し資産村内に一二を爭へども施こさず惠まず衆怨の的たりき。適々先年主人夭折以來、交々の不幸續きにて家人痛愁す。上人五香善光寺に歸院の途次來り乞ふて一遍の回向を懇願す。上人其家に至り玉ひ一同と共に讀經念佛御回願終れるの時未亡人の曰く、「御上人樣、此頃手前共の家では、主人が亡くなりましてから以來と云ふものは、如何いたしたものか不幸ばかり廻り合せまして、何んだか惡魔にでも魅られて居るのかと思ひますが、なんとか惡魔退散の良い法でもございませんでしやうか」と。上人曰く、「ハイ世間ではよくソンナ事を申して、惡魔とか不幸とか云ふと、何んだか屋根の上にでもソンナ者が居つて災厄でもする樣に思ふておらるる向きの方々もある樣ですが、それは誤りで實は此方のする善惡の業因によつて苦樂の結果が報ひられて來ますので、佛敎ではこれを自業自得といつて、これればかりは何人と雖もどうすることも出來ませんのであります。これを回復させやうとしますには內部の人々が善因を積んで行かなければ駄目であつて、デハどう云ふふうにして行けば良いかと申しますと、ソレに付いて例へて申しますれば、此頃よく權利義務と云ふことに付いて論じますが、世の中の事は皆この權利と義務とが相互にウマク行はれて行けば平和に治まつて行けるのですが、若しこれが權衡を失へるやうなことがあると色々の不祥事が差し起つてくるのであります。手近な例を取つて申しますれば、今こゝに一町の田地を所有して居る人は一町に對する自由の權利があると同時に、これに對する義務として納稅の義務を果して行かなければなりませぬ。若しこの義務を怠れば、やがてはその所有權を沒收されてしまはねばなりませぬ。デハその納稅義務をさへ果して行けば永久に其の權利が附隨して行くことであらうかと申しますと、コゝが極めて大切であります。納稅の義務は國民が國家へ對しての義務でありますが、尙ほ一層遡つて申しますれば、元來土地と云ふものは國家が新らしく

之れを造り出したものではなく、宇宙萬物は皆天の　大ミオヤの賜物でありますから、この天の惠みを受けなければ國家其物と雖も存在の權利を許るされないのでありまして、土地所有者でも一方その國民として國家へ納稅の義務を遂行して行くことは勿論でありますが、ソレト同時に今一つ天へ對する義務を果して行かなければなりませぬ。例へば一町の田地を有する人は、他のそれを持たない人々より以上に、其の田地へ對して太陽の光りや熱や雨や空氣等の惠みに浴して居るのでありますから、この恩惠に對して之に相應する義務をつくして行かなければ、恰も怠納が續けばやがては國家より其の權利が沒收せられる如く、はやり天よりその位置や權利を沒收されてしまはねばならぬことになるのであります。此の自然の結果として來たことを、世間では惡魔のさわりとか何んだとか他よりそうせられる樣に云ふのであります。孔夫子か天網恢々粗にして漏らさずと申されましたのも、この因果應報の一見麁なるが如くしてしかも嚴然とした事實であることを論とされたのであります。然らば富んだ人が貧しいもの以上に果たすべき義務は何んなことであるかと申しますと、人々その位置階級に相應する慈善博愛の義務でありまして、この義務を果して行く時に始めてソノ位置と階級が許るされて行くのであります。古人も子孫の爲めに美田を買はずと申しましたやうに、只た徒らに財物ばかり以て子孫永久の計り事が出來たやうに思ふのはまだ考が足りませぬ」と、後更らに儀容を整への玉はく「ソレに付けても御當家は村內に於ても一二を爭ふ御家柄ナノデ……わけてもその御心掛けて萬事を處して行かれますやうにさるれば自然と天の　大みをやの聖旨にも叶ひ冥助にもあづかられることでありますから……」と、夫人唯々諾々として拜聽し篤行の人となる。

○

未だ美光寺落成せざるの時、上人は日常の御衣食にも事缺き玉ひしことしば〳〵なりき。或る嚴冬の朝まだきに檀家の某、上人を訪づるや、上人お頭に藁切れを着けて出で玉ふ。某審りてその故を問へば莞爾としての玉はく、「此頃は寒さが強いから藁を

着て寢みます」と。又ある日の夕ぐれ人の訪ふや折りしも土鍋にて白き汁を沸つゝいませしに、人その何たるかを尋ぬるや微笑し玉ひに、「ハイこれは米の磨ぎ汁です、米は來客に供養してしましたので今日はその磨ぎ汁を煮て呑んで居るのです」と。

○

もと善光寺は小金町東漸寺の派出説教所として毎月白米一斗づゝを貰ひ受けつゝありしが、靜譽上人御遷化後出水不作の爲め内計困難に陷り從つて教會所も亦閉鎖せざるべからざるに立ち至りしを、上人、師の遺旨を奉せられんが爲めに獨りこのことに當り玉ひし故に、最初は附近より甘蔗、麥等を仰きて日々の糧に充て玉ひき。然るほどに適々東京講中が來寺のことありて、上人松戸町信者關口氏に至り白米五升を貰ひ受け歸寺し玉ふに、時恰も仲秋のこととて、附近の山林に簇生しける初茸を、來客の御馳走にとも留守居せし某取り來りて料理しける折なりければ、上人亦これを手傳ひつゝいませしに、話のなかば某の語るやう、「隣村初富區に某といへる困窮者あり。夫婦と幼なる二三人にて日々僅かに其日を送りけるが、過ぐる頃主人、些細なる刑法に觸れしかどによつて入獄しける程に、殘されし者ひとしほの哀れに覺ゆ」と。上人靜かに聞き居たまいしが、直ちに前記白米の内二升を携へ玉ひ、みづからその留守宅を訪れ玉ひて惠み與へ歸寺し玉ふ。翌日その母一升斗りの粟を携へ來りて禮を述ぶるや、上人再び之れに一升の米を與へて歸へらしめ玉ふ。

○

大正初年の頃上人松戸地方御巡教の折たまたま手賀村泉區龍光院(曹洞宗)に於て授戒會執行の事ありて、上人そが戒師に招待され玉ひしことあり。檀家惣代三四名、松戸町御留錫所へ御案内に來り、奉供して歸院の途次、藤心區子の神神社の麓を過ぎ行かんとせしに、上人獨り道側なる一の古井戸の前に至り玉ひて合掌十念し玉ふ。一同歸院の後に、お話しの序にその事を尋ぬるや、上人の曰はく、「私しが彼處を通過せし時アノ古井戸の中より一人の血にまみれた男が現はれて助けを求めし故十念を授けたのでありました」と、

附記、その四五年前該所にて賭博を爲し敗けたる者共にて勝ちたる某をそが古井戸へ突き落して慘殺せしことあり。

○

大賢愚なるが如しとか。上人御若年中より望みを遠大に馳せ玉ひて世事に渉り玉はざりければ、所謂小才がキクとか、或は輕き辯者の口さわやかなるに異りて、常に默々として朴訥なりければ、或は一見愚人の如きにも見へやしつらん。五番善光寺未だ成らず、小金東漸寺の派出説教所として月々寺僧を交代出張せしめをりし頃、上人また師の靜譽上人に附隨して來り玉ふに、靜譽上人折々村人に告げてのたまはく、此の辨榮は馬鹿坊主であります……馬鹿坊主であります……が、然し佛の道はよく守りますから」と。

かゝる程なりければその外見等に關しては殆んど風馬牛なりき。曾て東都に御勉學中の一日、例によつてウスきたなき木履にねづみ衣の色もあせたるが御身にも餘りし丈長き衣に袈裟して往來し玉ふに、適々前方より美々しく打ち飾れる一駕の前後左右に數多の侍者を隨へ長柄のひがさに護られたるが堂々として進み來れる一行に逢ひしに、その駕邊に停りて、中より威容正しき一僧侶下り降りて慇懃に上人を禮して再び乘駕し行き過ぐ。卽ちこれ下總國日蓮宗大本山中山法華經寺管長猊下にてありけるなり。後刻に至り彼の侍者等怪顏して事の因緣を尋ぬるや、猊下の曰く「ハア、そうか、お前共の凡眼にはわからなかつたことだローが、あの僧侶の兩眼からは光明を放つて居つたワイ、定めて凡僧ではあるまいと。

(附記此の話は親しく中山に至りて質せしものに非らず從つて二三代前の管長といふにて名まへ等も判然せざれど只だ附近現存中の古老間に專ら言ひ傳へられをる實話としてこゝに掲ぐ。)

○

上人に輓近歸依せし一信者の述懷談に曰く、私は東北のさる相當の家庭に育ちし者なるが、若年時代より信仰上の問題に就て煩悶し、最初キリスト敎へ走りしが得ず、次に或る有名なる禪師について參究中或時禪師が「淨土宗にも活佛が居る」と話された。爾後果して誰人が活佛ならんと尋ねをるうち計らずも上人に歸依篤き一老婦人（近藤祐子刀自）より上人を紹介せられて遂に今日に至れりとその宿善を喜ぶ。

○

曾て某寺住職某師が或人へ「私もお上人の樣に何かやつて人々に信仰をすゝめたいとは思もますが何分にも此邊は無信仰な者斗りで何をやつて見てもいつも損をするばかりだから駄目です」と語りしを上人傳へ聞き玉ひ、憫然として告げ玉ふやう、「やらないから駄目なのです。無信仰の者斗りだからこちらからやつて手本を示すのです。駄目だと云ふのは畢竟こちらのつとめが足らないからで、何事でも始めから出來上つたもののあるタメシがありませぬ」と。

○

上人の物質に對せらるゝや、一面に於て嚴格嚴峻に、一面に於てまた無私淡々。特に御若年中はその行くに任せ玉ひつゝありしを以て、其頃の隨行者の中には或は良からぬ振舞をせし者もありしやに聞く。曾て上人御歸鄉の節、座談にふれて御一族中の某女婿にこのことを御風諫せんものと思ひ「この頃隨行しておられる某氏に就ては世上兎角の風說がありますが如何でありますか」と。上人言下にやす〳〵と「ハイ〳〵その方はほんとうに何くれとよく氣を附けて呉れますので私もよろこんで居ります」と、某その以外なるに啞然として答ふるところをしらざりしと。

○

曾て某地御巡敎の途次たま〳〵日常御屁近なる某師の許に宿られし時、座談の折某師上人を揶揄して曰く、「上人〳〵、上人はよく人々からカツガレルと云ふことだが、

大丈夫ですか」と。上人平然として曰く、「ハア、むかうがかつげば、こちらでもかつぎます」と。

○

又曾て御若年中管長猊下の命を奉せられて北地へ御巡敎の折、兼ねてこのことを通知ありしことなれば、當日は先方數多の貴紳代表等威儀を整へて停車場へ奉迎しけるに、一向然る如き僧侶の下車なく、たま〳〵粗衣綿服の一僧の降り來りければ人々これに向つて本山代理のお方は未だ見へませんかと尋ぬるや、上人曰く、ハイ私がそれですと。

大正十二年十一月二十八日印刷同年同月十二月一日發行
誌代年六冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　土屋六郎
發行所　東京市小石川區茗荷谷町三十七番地
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番